泊まって、接して、ニーズを探る

高齢者福祉施設の動向に詳しい早川浩士氏は、「高齢者住宅・施設の設計者は、運営開始後、その建物に泊まってみるべきだ」と主張する。高齢者の生活や行動パターンを知らずには設計できないというのがその理由だ。岡山県を中心に高齢者住宅を設計している剱持建築設計事務所の剱持泰典氏は、自ら設計した高齢者住宅への宿泊を実践している設計者の一人だ。10月28日、東京都千代田区のグループホーム「ジロール神田佐久間町」に宿泊し、入居者と対話、その利用状況を調査した剱持氏に同行取材した。

剱持 泰典氏
剱持建築設計事務所代表。岡山県の社会福祉法人新生寿会（きのこグループ）などの高齢者住宅・施設を設計。既に10施設以上のグループホームなどで宿泊・体験調査を実施している

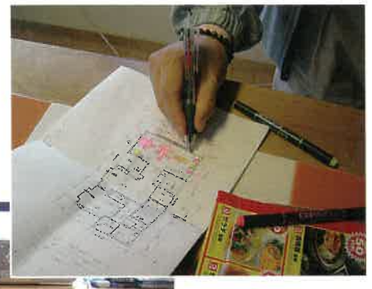
●ジロール神田佐久間町

10月28日（木）10：00

東京都千代田区にあるデイサービスセンター（1、2階）＋グループホーム（3～5階）。発注者は岡山県を拠点に介護事業を展開する「きのこグループ」。在宅ケア施設不足に悩む千代田区が、当初5年間は借地料免除で貸すという好条件を提示した。剱持氏は、日当たりなど最も条件の良い5階にリビングを配置。入居者の交流を促すよう配慮した

11：00 家具などを計測 図面にメモする

家具のサイズなどを計測し、図面に数値や気付いた点をメモしていく



家具は想定したようには配置されていないもの。サイズを実測して、入居者や運営者が求めるスケール感を体得していく

14：00 「ミス」を発見

将来、車いすでの利用も想定してトイレ前はフローリングに。しかし、布団の敷き場所になっていたり、想定通りにレイアウト、利用されているとは限らない。図面と異なる幅になっている居室もあり、「監理ミスや…」と剱持氏は残念がる

16：00 入居者とボール遊びも

プライバシー空間の居室内を見せてもらうには対話が重要だ。時には職員も交えてボール遊びに興じることも

22：00 夜勤職員に聞き取り 入居者の個性も把握

夜勤職員に入居者の行動パターンなどをヒアリングする。設計に直接反映するわけではないが、痴ほうの進行による居室の使われ方の違いなどを把握できるよい機会だ

翌朝8：00 思わぬ使い方の発見も

夜勤の職員は5階エレベーターホール前に机を置いて作業していた。居室からの移動を把握でき、物音も聞こえやすいからだ。設計時に意図していなかった使われ方に発見もある

設計上のこだわり

誘導灯は点滅しないタイプに

所轄消防署から、福祉施設適合で非常時には点滅するタイプの誘導灯を設置するよう指導された。剱持氏は点滅しないタイプにこだわった。誘導灯が点滅して音声を発すれば、痴ほう性高齢者はパニックに陥る可能性が考えられるからだ。このほか“福祉施設っぽさ”を排除し、住宅らしさを維持するため、防火戸でなく木の扉にするなどの要望書を提出し、いずれも認められた

窓は各居室2方向に

全居室で2方向に窓を設置。事業主であるきのこグループと剱持氏が常に心がけていることだ。日当たりや風通しを良くし、住宅らしさを醸し出す。東京都安全建築条例の窓先空地1.5mも確保した

●グループホーム温々（ぬくぬく）

10月29日（金）13：00

ジロール神田佐久間町から、東京都品川区にあるグループホーム温々へ。敷地は道路に面した角地約88m²。木造2階建てで6室の居室とリビングを設けた。ジロール神田佐久間町同様、基本的に居室にはトイレを設置している（2室はトイレがない）

16：00 見学後、競馬場へ

入居者と交流して、居室の使い方などを見学。午後3時に、入居者が競馬場へ遊びに行くことになり、急きょ同行することに。この後、入居者らとファミリーレストランで食事をして、帰路に就いた

参考資料①

陽新聞　第3種郵便物認可

グループホームをチェック

岡山の建築士・剱持さん

高齢者が少人数で共同生活するグループホームには痴ほう症の進行抑制が期待されている。自身が設計したグループホームに泊まり込んで課題をチェックしている岡山市の建築士、剱持泰典さん(四二)と笠岡市の施設を訪ねてみた。

（赤井康浩）

くらし

今年六月オープンした「きのこのき」（同市東大戸）。木の香りが漂う、和風のたたずまい。買い物に出掛けるスタッフと入居者は、孫と散歩するお年寄りといった感じだ。

「無機質な〝ハコ〟でなく、温かみのあるものをつくりたかった」。設計者の剱持さんは全国初の公立グループホームとなった「炉端の家」（同市吉浜、一九九六年開所）など、これまでに岡山県内の六グループホームの設計を手掛けてきた。

剱持　泰典さん

「設計して終わり」ではいけない ▶

きのこのきの個室のドアには、プライバシー尊重のため透明ガラス窓がない。入居男性(九五)は「ゆっくりできて、とても満足してますよ」。別の入居女性(七五)の部屋はきれいに整理されていた。「押し入れとトイレがあるのがいいんですよ」と言う。節目のない柱も気に入っている様子だ。

個室はあっても、室内にトイレ、押し入れまで備えた高齢者施設は少ない。事業者にとっては建築費が割高になるほか、「トイレは自室にあっても離れた共同トイレまで歩くお年寄りが多い」というのが理由。だが、剱持さんは「今はそれでよいかもしれないが、何年か後、足腰が弱ってきたらどうか。体が不自由ならトイレに時間がかかる。もちろん、人に見られたりするのは嫌でしょう」と話す。

グループホームでの高齢者の暮らしぶりが予想できなかったため、今後の検討課題も見つかった。フローリングと畳敷きに分割した居間だ。「入居者が小グループに分かれたり、お客が来ても意識しないで過ごせる別々の空間に」と畳の間を約三十㌢高くした。ところが、入居者はあまり畳に上がろうとしない。三十㌢の段差は「上がるのにきつい」という。

六平方㍍弱の台所もスタッフから「不便」と指摘された。冷蔵庫や水屋を置くと、台所で作業できるのは二、三人が限度。「食事を業者に任せる施設なら問題ないが、ここではスタッフといっしょに調理や洗い物をしたいというお年寄りが多い。何人もが使うには少し狭かった」

▲夜、寝付かれず起きだした入居者と語り合うスタッフ。グループホームには暮らしの目線に沿った設計が求められている

泊まり込んで生の声聞く

自分で設計した施設にはできるだけ泊まり込み、スタッフや入居者の生の声を聞く剱持さん。高齢者施設の設計に力を入れ始めたのは六年前、福祉先進国スウェーデンを訪れてから。

「今も工夫と反省の繰り返し。設計する方に思い入れがなければケアの足を引っ張りますから」

グループホームは全国約千三百カ所で開設されている。厚生労働省は二〇〇四年度までに三千二百カ所に増やす方針だが、ケアに見合った設計方法はまだ試行錯誤の段階だ。剱持さんは「設計者も造ったら終わりではいけない時代。完成後は、お年寄りと生活してみて問題点はなかったか、検証する必要があると思う」と話す。